

## その端緒と発刊の意義

一般社団法人 北海道地域農業研究所

顧問 太田原 高昭

### 一・「北海道農業ベクトル研究会」の発足

四年の歳月をかけた『新北海道農業発達史』が完成し、会員各氏への発送も終わり、完成記念パーティーまで開いてもホツとしている。「序言」や「あとがき」に書いたことと重複するが、まず私がなぜこの齢になつてこんな大仕事を始めたのかについて書いておこう。

私は一九六一年に北海道大学の教養部から農学部農業経済学科に進学した。当時は意識したかどうか覚えていないが、この年に農業基本法が制定された。そして卒業して大

学院に進んだ一九六三年に道立総合経済研究所から『北海道農業発達史』が刊行された。このことははつきり覚えているだけでなく、この本がその後の勉強の導きの星となつた。

『発達史』は崎浦誠治先生がリーダーとなり、当時の道立総研におられた塩沢照俊、三田保正、大沼盛男さんなど私たちの一〇年ほど先輩の方々が参加してつくられた大作である。この方々は皆な故人となられたが、今こうしてお名前を書いていても涙が出そうになるほど懐かしい。私はこの先生、先輩から『発達史』執筆の苦労話を聞きながら、万事を教えていただいて育つた世代に属している。

そのようなわけで、私はいつしか『発達史』が出てからそろそろ五〇年になる。その続編を書くのは我々の責任だ」と考えるようになっていた。最初に相談をかけたのは、農経同期生の黒澤不二男さんだったが、黒澤さんは言下に賛成して



くれた。きっと同じような思いがあつたのだろう。まず同志を集め研究会を始めようということになり、「北海道農業ベクトル研究会」という名称を考えてくれたのも彼である。この名称は、藤田理事長が「発刊にあたつて」に書かれたように、単にいつ何があつたということをまとめのではなく、そこから将来に向けてのベクトルを見いだせるような仕事がしたいという願望に発している。ベクトルというのは方向性というような意味であるが、単なる方向でなくエネルギーを伴つた概念である。方向と共にそれに向かうエネルギーの所在を明らかにすること、考えてみればたいそうな名前をつけたものである。

ベクトル研究会は二〇〇九年一月にスタートし、二〇一二年三月まで三七回の研究会を重ねた。三年間で三七回だから、月に一回は必ず開催していたことになる。それ以降も編集委員会ということで打ち合わせを続けながら、最後の執筆に入つた。大晦日のぎりぎりまでかかつてすべての原稿を渡すことができた。研究会の庶務を担当した研究所の和田さん、編集委員会を仕切つた上宗さん、そして編集の労をとられた北海道協同通信社の重堂さんの叱咤激励がなかつたらここまでたどりつけなかつたろう。心から感謝したい。

このように、単にいつ何があつたかをまとめのではなく、そこから将来に向けてのベクトルを見いだせるような仕事がしたいという願望に発している。ベクトルというのは方向性というような意味であるが、単なる方向でなくエネルギーを伴つた概念である。方向と共にそれに向かうエネルギーの所在を明らかにすること、考えてみればたいそうな名前をつけたものである。

一期下の長尾さん、一年上の土井さん、研究所所長の黒河さん、札幌大学の岩崎さん、元北大農場長の由田さんとほとんど同年代の人がそろつた。「老人クラブ」とか「お友達内閣」などの陰口もあつたようだが、これはやはり必然的なメンバーだつたのだ。

まず同じ年代であることは、最初に述べた私自身の経歴と重なつているということで、農業基本法制定前後に農業の勉強を始め、農基法農政、総合農政、そして国際化農政の下で北海道農業の研究を続けてきたという運命を共有している。したがつて『発達史』の続編を書くという仕事に使命感をもつという点でも共通している。早くいえばこの話を「断れない」人たちなのだ。

それに、『発達史』にならつて作目別編成とし、その執筆者を考えると「この人しかいない」ということになる。例外は私だけで、コメも野菜もとうてい専門家とはいえないのが、私なりに書きたいことがあつて担当させてもらうことにした。ただし当然ながら力量の限界があり、稻作では中央会で米対策を担当した柴田浩一郎さんに、園芸作では飯澤理一郎さん、坂爪浩史さん、杉村泰彦さんの市場論グループに助けてもらつた。

畑作は小麦が黒河功さん、てんさいが長尾正克さん、豆類が由田宏一さん、何れもその道の専門家として知られている。馬鈴しょは、若手だがすでに馬鈴しょについての好著がある小林国之さんにお願いした。農業經營学の大家である黒河さ

## 二・「農基法世代」が結集した執筆メンバー

さて研究会の構成だが、最初のメンバーは同期の黒澤さん、



んと長尾さんには個別作物だけでなく、畑作経営についての総論を書いていた。農経出身の同世代で豆を書ける人がなく、作物学の由田さんを無理矢理引っ張り出したのは大成功といえよう。

畜産編では、元酪農総合研究所所長の土井時久さんが当然酪農の担当となつた。土井さんは蓄積を生かして最大の長編を書いただけでなく、藤田直聰さん、関根久子さん、畠山尚史さんの専門知識を引き出して乳牛飼養、飼料給与の各論を豊かなものにしている。

黒澤さんが、道立農試で故米内山昭和さんと共に一貫して肉牛、養豚の研究を続けてきたことはよく知られている。また専門技術員として普及部門のトップにたち、現在は改良普及協会の会長も務めている。肉用牛、養豚の両編は彼のライフ・ワークとしても読めよう。岩崎徹さんはいわずと知れた馬産研究の大家で著書も多く、全国を探しても馬を書ける人は岩崎さんしかいない。

こうしてみると「お友達内閣」どころか、このような余人をもつて代え難いメンバーに集まつていただいたことに深く感謝しなければならない。また地域農業研究所のスタッフの皆さんには、経験を生かした貴重な助言や時には厳しいご指導もいただいた。私自身としては大学にいただけではどうてい書けないものを書けたという実感がある。

### 三・ TPP 参加表明と重なつた発刊のタイミング

先輩の『北海道農業発達史』は開道一〇〇年を記念して出版されたわけではなく、もつと深刻な背景があつた。これも序言に書いたことだが、当時の北海道農業は一九五五年前後の三年連続冷害などで存亡の危機を迎えており、冷害への恒久対策を求める寒地農業確立対策要求運動が官民挙げて強力に展開されていた。

農林省も北海道に対する特別立法の必要性を認め、そのための根拠となる北海道農業の歴史的技術的特質の研究を道立総研に委託し、その成果が『発達史』だつたのである。そしてこの大運動の成果は畑作の「マル寒法」や原料乳の「不足払い法」となつて実現した。これは社会科学の研究が現実の政策を動かした身近な好例といえよう。

私たちの共同研究のもう一つの大重要な参考書となつた本に、一九七六年に北海道農業会議が発行した『戦後北海道農政史』がある。この本も先の寒地農業確立対策要求運動の事務局を担つた農業会議が、この運動の経過と成果を歴史に残すべく企画したものである。本の内容はこの運動のことだけではなく、まさに戦後農政と北海道農業全般にわたるものとなつてゐるが、あらためて北海道農業の歴史の上でのこの運動の重要な意味を知ることができる。

私たちの作業が開始された時には夢想だにしていなかつた TPP という怪物が、途中から（菅内閣から）日本社会に重

くのしかかつてきた。北海道は知事を先頭としていちはやく「オール北海道」とよばれる反対運動を展開し、農協組織がその推進役として大活躍した。私たちもそのための理論構築や講演活動で運動の一翼を担うことになった。作業の後半はその合間に縫つて行われたような観がある。

そして発刊のタイミングは、ちょうど安倍総理による TPP 参加表明の時期と重なつたものである。『北海道農業発達史』が寒地農業確立運動のさなかに執筆されたのと同じように、この本もまさに北海道農業を守る運動に背中を押されて出来上がつた。私たちはそこに歴史の不思議な符合を感じざるをえないが、かつては研究を後押しし要求に応えてくれた政府が、この度は運動の向こう側にいるという点が大きく異なつてゐる。

TPP に反対し北海道農業を守り抜くための運動は、これからが正念場となる。そのためにこの本が役立つならばこんなうれしいことはないし、もしこの本が北海道農業の方向性とエネルギーを正しく指示示すものであれば、必ずその役割を果たすことになろう。関係者がこうした私たちの願いを生かして下さることを心から願つてゐる。